

① 女性の言語使用・言語観と世代差

遠藤 織枝

—はじめに—

世代を異にする女性たちが、自分たちの日常生活の中のことばについて、それぞれどう感じ、どう考え、どう処理しているかをS家、N家両家におけるインタビューから拾い出してみる。S家は3代、N家は4代とその孫の代の夫も加わった話し合いを通じて、それぞれの発言をテーマごとに抜きだし、まとめてみる。S家については巻末に資料をのせているが、N家のは次号にのせることにして、ここで参照できないため、発言をそのまま引用するときは、S、N両家とも論文内にも再現している。インタビュー内での録音資料、写真サンプルなどは巻末の番号を示すにとどめる。

1. 家族内での呼び方、呼ばれ方

発言者やその夫などが、家族の中でどのように呼びあい、呼ばれ合っているかをまとめてみる。インタビュー中、その人物を指す語として用いられた語がある場合は指示語として付記する。

[S家の場合]

Kの呼ばれ方

M(孫) → おばあちゃん

C(息子の妻) → おかあさん(2人のとき)、おばあちゃん(子供がいるとき)

Cの呼ばれ方

M(娘) → おかあさん

K(夫の母) → おかあさん、智恵子さん

実母 → 智恵子

妹 → 智恵子ちゃん(「おねえさん」ではない。女のきょうだいが多から名前では呼ばれる)

Mの呼ばれ方

K (祖母) →清美ちゃん

C (母) →清美ちゃん

Mの父 (Kの息子、Cの夫) の呼ばれ方

K (母) →お父さん、レイちゃん (指示語は「この人の連れ合い」)

C (妻) →お父さん (指示語は「主人」)

M (娘) →お父さん

Cの妹→レイイチロウさん

[N家の場合]

Yの呼ばれ方

A (曾孫) →ひいおばあちゃん、山のおばあちゃん

H (娘) →お母さん、おばあちゃん

U (孫娘) →山のおばあちゃん

N (孫娘の夫) →ひいおばあちゃん、おばあちゃん

夫→おかあちゃん

Yの夫の呼ばれ方

Y (妻) →おじいさん、お父さん (指示語は「お父さん」)

H (娘) →お父さん

Hの呼ばれ方

A (孫) →おばあちゃん、鶴見のおばあちゃん

U (娘) →お母さん、おばあちゃん、鶴見のおばあちゃん

N (娘の夫) →お母さん

Uの呼ばれ方

A (娘) →お母さん

Y (祖母) →由比子ちゃん

N (夫) →ねえねえ、あなた (指示語は「女房」)

Hの夫の呼ばれ方

H (妻) → (指示語) 遠藤さん、うちの丹那さん、お父さん

Nの呼ばれ方

A (娘) →お父さん

U (妻) →お父さん (指示語は「主人」)

Aの呼ばれ方

だれからも→あっ子ちゃん

S家では、Kを全員が「おばあちゃん」と呼んでいるが、Kの息子の妻であるCは、子供が一緒のときは「おばあちゃん」だが、Kと2人だけのときは「おかあさん」と呼んでいる。

またCは2人いる娘をそれぞれ「フミちゃん」「清美ちゃん」と名前で呼んでいる。長女を次女の呼び方に合わせて「おねえちゃん」と呼ぶことはしていない。

Cの夫レイイチロウについて、母であるKは孫からの呼び方に合わせて「お父さん」という場合と、幼いころからの呼び方で「レイちゃん」と呼ぶ場合がある。Cは娘たちに合わせて「お父さん」と呼ぶが、Cの妹たちは義兄にあたるCの夫を「おにいさん」とは呼ばず、名前に敬称をつけて「レイイチロウさん」と呼んでいる。また、Cも妹から「智恵子ちゃん」と名前で呼ばれている。姉が複数で「おねえさん」では区別できないからだという。ここでは、上位者に親族呼称で呼び、家の中の下の年齢の呼ぶ呼称に合わせるという一般的な日本人の呼び方と、名前で呼ぶ呼び方と両方用いられている。

N家ではYを「山のおばあちゃん」、Hを「鶴見のおばあちゃん」と呼んでいる。どちらも鶴见到住んでいるのだが、Yは高台に住んでいるので「山の」というようになったという。Aからは「曾祖母」で「ひいおばあちゃん」というと大変なおばあちゃんの感じだが、実際にはそれほどのおばあちゃんに思えないので「山の ——」の方をよく使うのだという。Yの夫についてはその子供やその配偶者たちが、もうおじいさんだから隠居して楽をしてもらおう、と話し合っ「おじいさん、今度一緒に〇〇へ行きましょう」と言ったら「おじいさんてどこにいる」と返事をしなかった、という。孫から「おじいさん」と呼ばれるのはかまわないが、その親たちから言われるのはとてもいやがるので、Yも二人だけのときは「お父さん」、孫がいるときは「おじいちゃん」と使い分けている。

Hの夫は5年前に死亡しているが、生前はHは「お父さん」と呼んでいた。実の父も「おじいさん」と呼ぶといやがるので「お父さん」と呼び、他人に話すときも「お父さんが…」と言う。そのとき相手に「え、どっち、あなた

のお父さんのこと？ご主人のこと？」と聞かれるので、父のことは「お父さん」亡夫のことは「うちの丹那、丹那さん、遠藤さん」などということにしているという。

N家の曾祖父の場合も、祖父の場合も、孫や子供から見た呼び方「おじいさん」「おとうさん」のいわば擬制の呼び方は忌避されたり誤解を招かないよう配慮されたりして使われず、本来の自分からみた呼び方にもどっている。

2. 人の容姿・服装などの形容のしかた

同じ人物や服装を見ても、それを見てどのように表現するか、その表現のしかたに年代差があるかどうかを見るために、4枚の写真を見せてその印象を語ってもらうという試みをした。座談会の中で、『資料』末尾に示した写真4枚を同時に見てもらって何でも気のついたことを話してもらった。以下にその印象などを写真別に語った人物ごとにまとめる。

〔写真①〕

S家のKは「しつこいから嫌い、今の色」と言い、Cも「色は現代の色、あまり好きではない、柄も好きではない、身についていない」旨の印象を述べている。Mは「派手」と感じている。また、Cは、好きではないと言った後で「でもこういう現代的な顔の人だから、いいんじゃないかしらとは思いますが」と補っている。

N家のAは「成人式の写真、ファッション雑誌的なわざとらしさ、上目づかいが気になる」と着物自体のことではなく、写真の女性の表情や写真そのものについての感想を述べている。Nも「お見合い写真？」とやはり写真の性質に関するコメントを述べている。Yは「足を内側へ曲げているのがかっこうがいい、手を結んでいるのもいい」と、写真の女性の手と足に専ら目を向けている。このYの発言を受けて、Uも「内またにしている、おくゆかしくみえる」と言い、Hも、Yの「手を結んでいるのがいい」に続けて「おくゆかしい感じがする」と言う。母親の「おくゆかしい」という表現に、すかさずAは「おくゆかしい？ふだんは使わない」と、母親と自分の語彙の違いに言及している。

〔写真②〕

S家のKは「じゅんに優しい感じ、色が合っている、体のかっこうも日本的、体が柔らかい感じ」と言い、Cも「優しい感じ、女の人だなあっていう感じ、着なれた感じ、①より日本的」と言う。それに対してMは「古風な感じ、着てみたいとは思わない」と否定的な印象を述べている。Kの「じゅんに」は形容動詞「純」の連用形の用法かと思われる。祖母と母が「優しい」と見るのを娘は「古風」とみるわけで、世代による受けとめ方の違いが表れている。KとCの形容する語として「日本的、日本的、女の人だという感じ」のように日本や日本人、女性を引きあいに出す表現が好まれている。

N家では、Hが「手を下げていて開放的、帯を見せるためか」と下げている手に着目し、その理由も考えた発言をし、Yも「手をぶらさげているのはだらしがない、働くのがいやだという感じ」と手の方に目がいて、着物の色や柄についてのコメントは出てこない。

和服の写真①と②で、S家では②の方が「優しい、体のかっこうもいい、着なれた」など①よりいいと見られているが、N家では反対の評価になっている。つまりN家では①の手や足の形が②よりよくて、①の方が肯定的にみられているのである。

このことは、同じ2枚の写真を見るのでも目のつけどころが変わると全く逆の印象になってしまうことを示している。

また、着眼点のずれについては、最初の発言にリードされて、それぞれ別の方に進んでしまった結果を示しており、話題の展開に対する主導権の役割の大きさがよみとれる。

〔写真③〕

S家のKは「④よりいい」と延べ、Cも「かわいらしい感じ、うちの子供の雰囲気似ている、モダンな感じ」と肯定的な感想を述べ、Mも「キュート、かわいらしい感じ、うち（の娘2人）はこの系統、行動的、いまふう」といくつかの形容語をあげている。母親が「モダンな」と言っているのに対して娘は「いまふう、キュート」と表現しているのも、使用語彙の年代差と言えようか。

N家では、Uが「スポーティで好き、かわいい」と共感しているのに対して、Aは「外国の女の子みたい、④よりいいが、えりの所があいていて寒そう、このようなカバンの持ち方はしない、帽子のかぶり方が深い」といろいろな点について感想をのべている。Hは写真の女性の手に目を向け、ポケットに手を入れているのを否定的にみて、「女の子がポケットに手を入れるつうのもあんまりしないもんね、する？」と自分の意見に同意を求めたのに対し、Aは「うん、うん、するけど、するよ」と祖母の見方を否定している。祖母の、女の子はポケットに手を入れないという思い込みと、あっさりそれを否定した孫と、ことばに直接関係はないが、そのしぐさ、動作に及ぶ女性の制約の受けとめ方の世代差がみられる。

〔写真④〕

S家のCは、ありふれた感じだが、③よりおとなしそうでいい、と言い、娘のMは自分や姉の感じではないが「どっちだったらこっちの方が女らしいって感じはするよね、なにげに」と言っている。

N家ではHが「こっちの方がいい」と言い、Uも③よりいいと同意したのを受けて、Aが汚れそうだと指摘した。それに対してHは「いや清潔でいいじゃないの、ズボンですっきりとね」と反論し、「こっちの方がすっきりと清潔で感じがいい」と重ねていうと、Aも「こっちがいいかな、やっぱり」と③との比較で④を肯定する結果になっている。Hはさらに「髪の毛もね、やっぱ女の子だからすてきだね、短いのもいいけどね」と長い髪④をもち上げ、追いかけて③の短い髪もいと、つけ足している。

洋服の2枚の写真については、S家の3人は③の方がいいとし、N家のH、U、Aは④の方がいい、と両家で評価が分かれている。S家では2人の娘のふだんの感じにより近い③のスポーティなかわいらしさが受け入れられ、N家では④が薄い色の上下が清潔、すっきりしているとして好感をもたれている。ただしS家のCはKが③の方がいいと言ったのを受けて家の子供の雰囲気もこちらだしモダンな感じもすると同意し肯定しているが、最後には④のほうが「おとなしそうでいいんじゃないかと思うけど」と結果としてどちらも肯定する発言になっている。N家のHも④の髪型をほめすぐ後で③もほめ

る配慮をみせている。

祖母のK、曾祖母Y、娘A、Mは、はっきり言い切ったら、それを言い直すことはなく、このような矛盾した発言はみられない。母の世代と娘の世代の中間に立つCやHの話し方には、断定したり、一方に加担したりするのを避ける配慮が見られる。

3. 話し方から受ける印象

女性の話し方について、どのようなタイプの話し方が好まれるか、それが世代により異なるかどうか、④60代の丁寧な話し方の女性の談話、③30代の女優のあまり敬語のまじらない話し方、②30代の映画監督の飾らない話し方の各3分ぐらいのテープを聞いてもらってその印象を尋ねた。④③②の談話を書き写したものは『資料』（172～173頁）に示している。

〔テープ④〕

S家のKは「落ち着いた気持ちで聞かれる、なじみやすい」と言い、Cは「戦前の方のような感じの話し方、耳慣れてるような感じのことばづかい、今の話し方とは全然違う、丁寧だが、自分にはこういう話し方はできない」と述べている。Mは祖母の「聞きやすい」に対して「わたしたちが友達とこのテープを聞いたら、きっとわざとらしいって思います」と言い、敬語が多く使われているのは「女性的とかそういう気持ちはあんまりしない、どっちかっていうと古いという感じ」と、3代それぞれ異なった印象を述べている。

N家のHは「すごく丁寧」で自分は「あんないいことばは使わないな」と言い、話を合わせるとしたら「ふだん使わないことば一生懸命使ったりしなくちゃなんない」と述べている。Uは抵抗は感じないが「一緒に話すとなると考えながら話さなくちゃならない、しっかり聞いてあげて自分たちのことばづかいが悪いと申しわけない」と言い、いやとは思わないが、対応ができない、との感想を述べている。Aは、着物を着た大女優という感じで抵抗があり、この話者の「ごぞいます」には「ちょっと勘弁してください」という感じだという。

デザイナー出身で服飾関係の会社を設立し、世界的に活躍している60代女性の敬語の多い丁寧な話し方を、祖母の世代は好意的にうけとめ、母の世代は肯定しながらも自分は同じような対応はできないとためらい、娘の世代は抵抗が強く「勘弁してください」とまで言い切っている。落ち着いた中年女性の丁寧な話し方を、若い世代M、Aは自分たちとは異質な遙かな存在と感じているようだ。

〔テープB〕

S家のKはAと比べて「ああ時代が違ってきたなっていう感じ」と述べ、Cは印象が薄かったと言い、「職業的っていうか、こう自分の気持ちのことがばに出てないような気がした」と言う。Mは、民放系のアナウンサーの感じで「ねえ」を多く使っていてCよりは「女っぽく」「現代風」だとの印象を述べている。Kのこの話者についての発言はない。CもMもAより身近に感じていて否定的なとらえ方はしていないが、特に好意を示す発言もしていない。

N家では、Hは、この話者はリラックスして話していて「ふつうに自分と一緒にしゃべれるんじゃないかなと思った」という。Uも「話の内容もよくわかるような気がしますね」とHに同調している。

〔テープC〕

S家ではこの話者についての印象感想は述べられていない。N家のHは、「つかかるね」と耳に抵抗があることを示し、孫娘のしゃべるようなしゃべり方で「むだのない、物足りないような、伝わってこないような感じ」がしたと言う。Uは母親の否定的な感想に対して、「そんなことは感じなかった、ああ若くていいなあ、これからだと思って聞いていた」と言う。「あっ子ちゃんと同じ年代ですよ」と言っているところからも、娘の話し方を肯定するのと同一直線上において好意的な反応を示している。

Aは話の内容についてはこの話者の「いちばんいい」そうだが、アナウンサーの問いに対して「『そうですね』ってまず言ってから言うでしょ。それがやなんですよ」とCの受けこたえの話し方に注目して、それを否定している。これを聞いたYが「それが大事な、相手のことばを聞くちゅうこと

も」と曾孫Aをたしなめ、「相手が何か言ったら1回『そうですね』ってその人のことばに合わせて何かを言うでなくちゃいけない」と、教えさとして
いる。Aは曾父母の「それが大事なの」と押さえつけるような言い方に「大
事だけど、やっぱり」と一応は認めながら承服していない口調を残している。

◎のテープをきっかけにN家では、祖母の世代Hと母の世代Uとが対立を
みせ、また、インタビューの問いに答える際直接答えないで、まず場の雰
囲気を柔らげたり、相手に強く響かないように顧慮したりしてあいづちのよ
うに「そうですね」と言うことを娘の世代のAが強く拒否しているのに対
して、曾祖母がその配慮こそが大事だと力説し、若い世代と高齢の世代との
受け止め方の違いが鮮明に出ている。

4. 家族の中でのことばの使い分け

同じことを言うのでも、相手が祖母であり父であり姉であると、それぞ
れ違う言い方に切り替えているか、あるいはその切り替えをせずだれにでも
同じような言い方になるか、その切り替えの様子を知りたいと考えて、「食
事ができたと知らせる」「何か取ってほしいと頼む」など、話す内容を一定
にしてそれぞれが、相手別にどう言い分けているか、区別していないか、な
どを述べてもらった。

〔食事の用意ができたことを知らせる言い方〕

S家のCは、夫の母であるKには「お母さんお食事ですよ」と言い、食
べるかどうか尋ねるときは「これ召し上がりますか」と言う。「食べますか
」と言ってしまって、後でしまったと思ったこともあるそうだ。夫には食
事を知らせることはあまりないが、朝など「先に食事にしますか」「ごは
ん食べますか」「食事先にすませますか」「ごはんになさいますか」など
と言う。娘には「早くごはん食べなさいよ」と言う。娘のMは祖母には
「ごはんですよ」だが、父、母、姉には「ごはんだよ」と同じ言い方をし、
父に食事を知らせるとき、他にも「お父さん、ごはん」「一緒に食べようよ
」「一緒に食べる？」のような言い方をする。

Cは夫の母、夫にそれぞれレベルの違う敬語を使い、娘には命令形の丁寧

な方を用いて、それぞれ使い分けている。Mは祖母Kに対しては「です」をつけて敬体で話す、父には特別扱いせず、母、姉に対すると同じ常体で話している。

N家は、Hは母親のYには「ごはんよ」「ごはんできたわよ」ということもあるが、ふつうだれにでもいうときには「ごはんだよ」で「だよ」が出てくる。また「食事」ということばは使わないという。Uは祖母には「おばあちゃん、ごはんよ」、母には「お母さん、ごはんよ」、夫には「お食事できたわよ」、娘には「ごはんよ」という。娘のAはだれにでも「ごはんできたよ」だが、たいていは「ごはん」と叫ぶだけ、おふろの時も「『おふろ、次』って叫ぶ」のだそうだ。

N家も母の世代Uが相手によって敬体加わるだけで、S家のCほどの使い分けはしていない。これはYもHもUにとって実の母であり、母方の祖母という関係からのものであろう。なおYは、自分の家で息子の妻からは「お母さん、ごはんできましたよ」と敬体で呼ばれているという。夫の母に対してS家もN家も、他の家族より高い待遇をしている点では共通している。

娘の世代はMもAも父親に対して特別扱いをしてはいない。これは母、祖母と明らかに異なっている。すなわち、ほかの話題のときに、Mの祖母Kは小さいとき、「そういうことばはお父様に使っちゃいけない」とよく言われたと言っているし、Cも「父に対しては雑なことばも使えなかった」そうであるし、N家のHも、父親にものをいうときは考えながら話す、と言っているように、S家のK、Cにとっても、N家のHにとっても家族の中で父親の存在は特別高いものであった。それが、娘たちは両家とも父親とは友だちと話すことばと変わらないことばで話しているのである。ことばの使い方や使い分けについて、家族の中で伝わるものよりも社会的環境によるものの方が強いことをこの例は示唆している。

〔何かを取ってほしいと頼むとき〕

S家のKはCに頼むとき「あれほしいんだけど」と言う。CはKには「おばあちゃん、ちょっとそれ取ってください」と言い、娘のMには「新聞取ってきて」である。MはCにも父にも姉にも「それ取って」と言う。

Kは取ってほしくて頼むときでも、「取ってくれ」「取ってちょうだい」のような直接依頼するような言い方はしない。「あれほしいんだけど」と自分の希望だけ述べて、相手に行為を起こさせるという婉曲な表現をとっている。娘のMの「取って」という補助動詞部分も省いた単刀直入な表現とは大きな開きがある。

N家では、Yは娘Hにも孫娘Uにも曾孫Aにも「新聞取ってきてちょうだいよ」という。87歳のYの夫は「新聞取っておくれよ」というそうだ。Hは娘Uに「新聞ちょっと取ってきて」「それ持ってきて」と言い、Uは母Hや夫Nには「新聞とってくださいませんか」で娘には「新聞とってちょうだい」だという。Aはだれにでも「新聞とって」「ちょっと新聞」だし、Aの父のNはだれにでも「新聞とってちょうだい」だそうだ。

Yは「～ちょうだいよ」と「よ」をつけることを意識して何度も繰り返しているが、この「よ」は下がり口調の話者の意志を押しつける調子のものでなく、軽く添えて「ちょうだい」と言い切る語調を柔らげる作用のものである。Yの夫の「～おくれよ」は現在の共通語としては使われていない言い方だが、90歳近い山梨県生まれの男性に、古い言い方が残っている例と考えていだろう。

娘のAがだれにでも「取って」や「新聞」とだけ言うのと、Aの父のだれにでも「取ってちょうだい」とを比べると、娘の方が父親よりぞんざい、父親の方が娘より丁寧ということで、ここには男性のことばと女性のことばの接近、逆転現象の一端がみられる。

5. ことばのしつけ、ことばに対する考え

〔S家の場合〕

(1) Kのことばとその意見

自分が育つとき、父がことばにうるさくて厳しく言われた。きょうだいの名前を呼ぶときは「さん」までつけなさいとか、父親に対するものの言い方で「そういうことお父様に言うもんじゃない」などとよく注意された。

子供を育てるときは特にことばのしつけはしなかった。自分がことばにつ

いて注意されて育ったから、娘たちには注意するのをやめようと思った。

孫娘のことばづかいについては、自分の代ではないから常に譲っている。

息子と話すときは、親のKのほうが息子をたてているとCは観察し、孫のMも「敬語っばい」話し方をすると感じている。

2人いる娘に対しても、上の娘と話すときは少し距離のある話し方をしますが、下の娘に対するときはあまり隔たりがない話し方をしている、とCは見ている。

テレビに出てくる女性の乱暴な話し方には否定的であるが、ことばが変わってきていると思うかの問いに対してはそれはあまり感じないと答えている。

孫の話し方は改めて考えてみると「ちょっとちょん切れたような」話し方だが、特に気にならない。

(2) Cのことばとその意見

父に対しては雑なことばも使えなかったが、きょうだいは上も下も名前で呼びあっていた。そのため、夫の姉から、夫の母に電話があったとき「〇〇子さんから電話ですよ」と言ったら、その義姉から目上の人に対して名前と呼ぶのはおかしいと言われたことがある。

夫の母のことばづかいは丁寧で、Cは「来た」と言って「いらっしやいました」と直されたりした。

ことばのしつけというものを受けてこなかったから、子供に対してもしていない。娘2人を育ててきたが、女の子らしいことばづかいをさせようと思っただけでこなかった。

自分の娘時代は、女らしくということはないが、しなしなとしたようなはっきりしないような物の言い方をした。男っばいことばづかいはしたことがない。男の人達と遊びに言ったときなどは女らしいことばづかいをしていたように思う。

下の娘は、上とくっついていたので、小さいころは夫は男の子扱いをしていた。スカートをはいたことがなくいつもパンツという具合だったから女らしくなかったのかもしれない。しつけが悪かったのかもしれない。

娘Mが中学生のころ、友達と電話で話しているときとても汚いことばづか

いだったので注意しては娘に怒られていた。友達と呼び捨てだったし…。

娘たちのことばをきいていると、とてもはっきりした言い方をしている。女らしいことばを使うのは聞いたことがない。

親戚の中には女らしく感じる子がいるが、その子の話し方は、しなしなとした、なんとなくはっきりものを言わないような感じがする。

娘に自分の娘時代のような女らしいことばづかいができるようになってほしいとは思わない。時代が変わっていくし、結局男も女もなくなったのかなと思う。今の若いお母さんたちの話し合うのを聞いていても、あけっぴろげで、はきはき、ずばずば言っていて、今の若い人のような話し方になっていると思う。

ただし、あまり口汚いことばは困るし、同じおはようございます、と言うにしても、ただぶっきらぼうに頭下げて言うのではなく、ちょっとことば変えて女の子らしいあいさつができればいいと思う。

(3)Mのことばとその意見

中学生のとき、友達を「鈴木」とか「佐藤」とか苗字を呼び捨てにしたり、「だから～さあ」というような汚い言い方をしていたし、「てめえ」などもはやっていて、それらを使って注意されたことがあった。

大学に入ってことばづかいが変わったと思う。みんな丁寧だし、自分もゆっくり話すようになった。

しかし、女ことばは自分には合わないと思うし、使いたくないと思う。同じ場で男の子とも意見をかわしていかなければならないとき、そういうことばではやっていけない。ある種の武器のような形になってしまうのはいやだと思う。

「～かしら」は、母は使っているが自分は絶対に言えない。しかし、結婚して近所の人と話すような場面を想像すると、そういうときは今のことばとは変わっているような気がする。将来子供が生まれたら、日本語学を専攻したのとして子供に、そういうのはいけないと、びしっと言ったりしてうるさくなりそう。女の子には「～かしら」「～なのよねえ」などのことばづかいをさせたい気持ちがある。

男の人の話し方については、男の人も女の人も一直線上で、同等の感じでしゃべっていると思う。敬語はきびしい（敬語を使いこなすのは難しいの意 遠藤注）。

男の人がどんどん真ん中に近寄っている。女の人がどんどん、はきはきと言うようになっていく。男の人は女より上という時代ではない。ことばも真ん中に近寄っている感じがする。その近寄った中間でも丁寧だったらいい。いわゆる男らしい話し方の人は好きではない。やさしくゆっくり話す人が増えてほしいと思う。

S家の女性たちのことばについての意見や感想を整理してみると以下のようになる。

まず、Kは自分はことばに関して厳しいしつけを受けたと語り、息子の妻のCも孫のMもKの話し方は丁寧だと認めている。それなのに、子供に対しては自分がうるさく言われたから子供には言わなかった、と言う。自分がされたことを子供にはさせなかったということは、自分の受けたしつけを否定的にみていることになる。

母の世代のCは、自分はことばのしつけは受けていないから、夫の母のような話し方はできないことをひげ目に感じているふしがみられる。そうではあるが、またしつけを受けなかったから娘たちにもしつけをしてこなかったともいう。

祖母の代は自分がことばのしつけを受けたから、母の代はそれを受けなかったから、と全く相反する理由で、どちらも娘のことばのしつけをしなかったことになる。こうした発言をなぞっていくと子どものことばについては、少なくともしつけを意識的にしたことはなく、なりゆきにまかせてきたということになる。

祖母も母も娘のことばづかいは自分たちの使うのと異なり、女らしいことばではないと認めているが、それを奨励したり歓迎しているとまではいかないが、少なくとも容認はしている。

Cは女らしいことばづかいをする親戚の子の話し方ははっきりしないと否定的にみている。また、Cは自分の娘時代のようなことばづかいを娘に求め

てはいない。娘たちのはっきりしたものの言い方を肯定する反面で、どこか優しいもの言い方を求めている。日々一緒に暮らしている家族として、丁寧で柔らかな夫の母の話し方も尊敬し、はっきりものをいう娘たちの話し方も肯定し、その両者の矛盾をできるだけ少なくする緩衝剤の役割をCは担ってその間を揺れ動いているのである。

Mは、中学時代は乱暴なことばづかいをしていたが、大学入学後は周囲の影響もあって丁寧な話し方に変ったというが、それでもいわゆる女ことばは使えないし使いたくないと考える。男性と意見かわすとき女ことばでは話し合えないし、それを武器にすることもしたくない。しかし子供には自分が使えない代りに、使わせたい気がする、と言う。母や祖母と同じく、自分と別のものを子どもに求めさせたいという点では3世代共通している。

祖母は他人も自分も認めているとおり、ことばづかいは丁寧で、テープ④のような「ございます」を多用する話し方に共鳴している。そうではあるが、孫や若い世代の「ちゃん切れた」ような話し方も否定してはいない。孫も女性らしいことばは使えない、使いたくないと言いつつも祖母には「ごはんですよ」と他の人に呼ぶのとは違うことばづかいをしている。

世代によって異なる部分も数えあげれば多くみられるだろうが、それよりも容認しあえる部分が多い、相違点は認めながらも、それが決定的な対立や強制とならないように互いに無意識のうちに譲り合い許し合っている、というのが家族のことばなのかもしれない。

〔N家の場合〕

(1) Yのことばとその意見

子供のときは朝起きると「お父さんお母さんお早うございます」

夜ねるときも「お父さんお母さんおやすみなさい」と言わなければ寝られないような生活だったが、それがだんだんくずれてしまった。だから自分の子供のときにはそういうことはさせなかった。

水晶の印鑑などを売る客商売だったから、ことばは丁寧にした。何か一品でも買ってもらうには先方をあがめなければいけない。ことばほど大事なものはない。ことばの使い方でも鬼にも蛇にもって昔の人が言ったとおり、ことばは造作もないようでむずかしいものだ。

Yとその夫はことばづかいがすごく丁寧だとその娘のHはみている。Hによれば、大工であった父親は、家を建てさせてもらうお客に対することばというので、いつも丁寧なことばづかいをし、人をみくびったようなことばは絶対に使わないという。

(2)Hのことばとその意見

父親が荒いことばが嫌いだから、今でも父に言うことは考えながら話す。きょうだいとしゃべるときとは全然違う。きょうだいとは「そうだね」「そうしようか」などと話す。父には「そうね」「そうですね」のような言い方になる。

父には、何でも丁寧なことばを使えば自分も一つ上にみられる、とよく言われた。

自分の若いころ、周囲に奉公にいかなければ、という人がたくさんいたが、家ではかわいそうだということで奉公には出なかった。奉公に行くとことばが違ってくる。乱暴なことばを使うと主人に怒られるからことばに始終気をつけなくてはならない。その奉公に出なかったからことばはあまりいいほうではない。まあ標準だと思う。

小学校3年生のとき甲府から鶴見に引越してきた。ことばがわかりにくくて困った。先生にも「ことばに気をつけなさい」と叱られ、「悪いことばは使ってはいけない」と言われた。自分では悪いことばと思わなかった。山梨にいたときと同じことばを使っただけだから。

娘を育てていてことばで気になったことはなかった。でも「～だよ」という言い方がすごくはやったとき、娘がそれを言ったのを聞いて夫がすごく怒った。「女のくせに『一よう』『一よう』言うんじゃない」って。娘を叱ったことのない夫だったが珍しく怒った。息子もそういう言い方はしていたが、息子は他のいたずらが激しくことばの注意まで手が回らなかった。でも息子はいま商売していて丁寧なことばを使っている。

会社ではことばが丁寧だとよく言われる。また、娘と電話しているのを他人が聞いて「だれと話してるの、そんな丁寧なことばで」と言われることがある。娘に話すのになぜそんなに気を使うかと、きょうだいに言われる

こともある。電話は顔が見えないから誤解を招くといけないので娘でも丁寧
に話している。

③Uのことばとその意見

小学校のころは横浜弁の「そうじゃん」「～じゃん」という「じゃん」こ
とばを使っていた。銀行へ就職してまず直された。直すのにすごく苦労した。
4月に入行して、7月に親戚が集まったときに直されたことばを早速使った
らひやかされた。仕事にさしつかえるので標準語をしっかりと習った。2、
3年間は、高校の友達と会って「じゃん」が使えるとほっとした。しかし、
その後「じゃん」は使わなくなり、結婚して銀行をやめた後も「じゃん」は
もどってこなかった。今は、たまに聞くととても懐かしい。

家で娘と話すときは友だちのように話す。家で野放図にのんびり話してい
たが、ヨガの教室を始めたおかげで標準語を話すことが多くなり、そこでは
「です。ます」ことばで話す。

娘には、小学校に入ったときに「親のことは他人には母と言いなさい」な
ど、ある程度のことは教えておいた。娘は子供のときからことばは丁寧だ
と思う。娘の中学校は東京の女子校で、ことばのしつけにうるさい方でいい学
校だった。若い人の使う「見れる」にはとても違和感がある。「ら」が抜け
て、せっかくあったものがなくなってしまったのはもったいないと思う。

現在、娘の話し方はストレートな感じがする。意思表示がはっきりしてい
る。自分の時代は、自分の意思を言うがある程度丸めて言って相手の反応を
見ながら話した。はっきり言うが丸めながら聞きながらということで「ね」
がよく出る。その方が相手を傷つけなくていいと思う。娘は今は若いから自
分の意思をしっかりと言うのはいいと思うが、ある程度年をとったら相手のこ
とばをよく聞くためには少しことばを濁したりする方がいいとわかってくる
と思う。

自分も若いころはストレートな言い方をしていたかもしれないが、今はあ
る程度くるみながら考えながら相手を意識しながら自分も図々しく化けてい
ると思う。

④Aのことばとその意見

「見れる」は言わないで「見られる」を使う。「ら」が抜けた言い方はあまりきれいだと思わない。電車の中で高校生や自分と同年代の人が集まって話しているのが耳に入ってくるといやだなと思う。自分もああいうふうにしゅべっていたらいやだなと。自分がことばを専攻しているからかもしれない。「～だね」より「～だよ」を多く使うし、「～かしら」ではなくて「～かな」を使う。「～かな」の方が自分の言いたいことを言っているような気がする。「～かしら」は言わなくては、と意識しながらでないと思えない。「～かな」は別に女が使っても悪いとは思わない。「オレ」とか言えばやっぱり悪いかなと。

丁寧にしゃべる機会がない。先輩といっても1年しか変わらないから仲よくなればあまり変わらないようにしゃべってしまうし、大学の先生には一応「です、ます」で話すくらい。外で話すときも家で父、母と話すときもことばは変わらない。将来職業についたら変わらざるをえないのではないかとは思うが。

⑤Nのことばとその意見

テレビを見ながら、あのことばはおかしいというようなことはよく言う。最近の「とか」語が気になる。いやだ。

若い人の話を電車の中で聞いていると男の子だか女の子かわからない。昔ははっきり違っていたと思うが、最近は共通のことばづかいという感じがする。ことばの良さは残ってもいいと思うけど、男だ、女だと言ってる時代じゃないから――。

女はこのことばじゃなきゃ女らしくない、とか強制されるのはよくない。ただ、ことさら男っぽい言い方だとちょっといやだという感じはある。

娘には、使う使わないは別にして、いろいろな表現方法があることを知って身につけておいて、とっさの時にはきちんと使えるようなふうになってもらいたい。あまりにも一方的にこのことばしかないという言い方だとよくない。

N家の人々のことば観をまとめると以下のようなだろうか。N家の人たちは、Yの夫が娘の夫から「おじいちゃん」と言われて腹を立てたことを何度

も話題にし、実のおじいさんでもない人にそう呼ぶのは適当でないとYの夫の意志を尊重する発言をしている。Yはことばづかいの良し悪しが日常の経済生活に影響を及ぼした経験から、相手への配慮を第一に心がけることばづかいを主張する。

Hも孫のことばは「もの足りないような、伝わってこない」ようだと感じている。

Uは若いころははっきりものを言うのもいいが、年とってくると濁した方がいい、と自分の実感や体験を踏まえて言う。娘のことばについては、娘が食事を呼ぶのに「ごはん、と叫ぶだけ」とか、父親が「新聞とってちょうだい」に対して「新聞とって」と父親よりもぞんざいであったりしているが、娘の話し方は丁寧な方だと見ている。それは他の若い人やTVの中の若い人の話し方と比べて「丁寧」と見ているのだろう。

Aは、「新聞!」「ごはん!」など、ものを頼んだり呼んだりするときは単語だけのぞんざいな言い方をするというのだが「見れる」などのら抜き表現は絶対認めようとしなない。いわゆる女性語は使わない。その言い方では本当の気持ちは伝えられないとも言う。

Aの父のNは、男だから女だからと性によって区別する時代ではなく、女だからとの理由でことばの強制はしてはいけない、と娘のことば観を支持している。ただ、場合によってはその場にふさわしい表現が使えるのが望ましい、と考えている。

どの人物もある部分では矛盾した発言を多かれ少なかれしているが、これが現実というものであろう。終始一貫して同じ論理の線上で整然と自分の言語や言語観を述べるとしたら、それこそ不自然かもしれない。

それにしてもS家、N家の話者どの人も自分のことばについて適切なエピソードをまじえてよく語ってくれている。非常に協力的で司会者の意図をよみとって積極的に話題を展開させていってくれている。このような家族を調査の対象とすることができたのは非常に幸運であった。